

## 平成20年度質の高い大学教育推進プログラム審査結果表【選定】

機 関 名	奈良県立医科大学				
取 組 名 称	地域に教育の場を拡大した包括的教育の取組				
取組学部等	医学部医学科				
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取組				
整 理 番 号	A21081	申 請 の 形 態	単 独	取 組 期 間	3 年
申請の分類	専門基礎	体験活動	職業教育		
キーワード	地域基盤型学習, 学外学習, 地域医療の充実, 地域連携				

### <選定理由>

本取組は、奈良県立医科大学が、全学的に地域医療に取り組もうという姿勢が伺われる。いくつかの提案があるが、中でも入学時から僻地診療所医師などを指導者として配置する「メンター制度」は、地域枠・緊急枠医学部学生にとって、地域医療の重要性、医療の真の姿を見せる上で、貴重な体験となると考えられる。6年次の地域医療体験実習も地域医療の重要性を教える点で、優れた試みといえる。今後、地域医療教育を、地域枠入学者から一般枠入学者にまで広げられるべきであろう。

さらに、地域の行政機関や医療施設などとの連携を一層図っていただき、地域医療の充実に寄与されることを期待する。

取組の概要【1ページ以内】

地域医療の充実、昨今の医療問題における急務の一つである。そのためには、地域に根付き、地域に貢献することを喜びと感じ、これに積極的に参加し、地域の現場で実際に役立つ総合力のある医師の育成が求められている。そのニーズに答えるためには、学習の場を大学から地域へ拡大し、学習者は早くから医療人として地域に参加し、この体験から医療人としての責任を強く自覚していることが重要である。この趣旨に基づく取り組みである「地域基盤型教育」カリキュラムにより取り組むことで、本学で本年からスタートした地域枠、緊急医師確保特別枠の入学者を中心に地域志向型学生の教育と地域定着にも対応することが可能になる。具体的な方策として次のような取組を用意し、すべてを一貫したカリキュラムとして実施して行く。

実習として、1) メンター制度：1年生から4年生までの間に、へき地医療のメンターにはへき地診療所の実地医家の協力を得る。また他の領域については、県医師会に属し、地域医療に携わっている開業医師に協力を依頼する。夏休み、冬休みなどの長期の休暇を利用して、実際の臨床の現場に出かけ、現場を見学し、補助者として活動し、医師からメンターとしての指導を受ける。このメンターとの交流を中心に以下の学外実習、2～6)を1～4年次に実施する。2) 医学特別実習：附属病院での患者のエスコートや補助業務に就くことにより、患者及びその家族との触れ合いを通して患者側の気持ちを理解するとともに、医師と共に働くコメディカルの各職種の役割を理解する。3) 救急車同乗体験実習：アーリーエクスポージャーの一環として救急車搬送による疾病者に対する病院前救護の体験実習を行い、地域における救助活動の現状とそれに関わる医師および医療者の職務を1日体験として学ぶ。4) 社会福祉・介護体験実習：県内各地域の社会福祉施設におけるボランティア等の体験を行い、高齢者や障害者等のハンデキャップを持つ人々や介護の仕事に就く人々との交流を通じて、それらの人々の医療・保健・福祉の現状を知る。5) 幼稚園ぬいぐるみ模擬病院実習：学生が、普段、幼稚園の子供たちが大事にしている「ぬいぐるみ」を模擬患者に見立てて診察を行い、親に見立てた園児に病気について説明する。幼稚園児には、病気や体のこと、健康に興味を持ってもらい、他人を労わる心を養ってもらうことを目標に、学生には、子供たちに病気の説明や健康教育が出来るようになってもらうことを目的として実施する。6) 保育所実習：保育所での幼児との1:1のコミュニケーションを通じて、ホスピタリティーマインドを学ぶ。7) クリニカルクラークシップ：6年次前期において、1領域4週間を1単位として4単位実習する。県内の病院を主とする臨床実習を体験することで、地域の病院の医療状況にふれるとともに、地域病院との連携を深める。8) 地域医療体験実習：6年次の全学生が6名程度の班となって、主に県内15か所のへき地の診療所において1週間程度の診療体験を積むことで、へき地医療の大切さや必要性を経験させる。9) 健康相談実習：6年次に地域における検診などの業務に付随した健康相談に指導医と混じって参加や見学を行い、医師となる者としての自覚を高める。

以上、附属病院内実習とともに上記の多角的実習を行い、講義として奈良県下の他大学とのコンソーシアムも実施し、これらを統合して地域基盤型学習と位置付け、地域医療を担う医師としての自覚を高め、現行の学外のクリニカルクラークシップの内容がより地域に密着した充実したものになることを目指す。この結果、本学の卒業生が、卒業時点ですでに医師として十分活動することが可能なまで成長し、延いては地域の医療の活性化に貢献することにも結び付くと考えている。